

戦時下の安房高等女学校の勤労働員

1. 学徒勤労働員 ～少女達の出征～
2. 勤労働員下の青春
 - ・兵器生産の総合工場へ
 - ・ため息列車～寮での生活
 - ・死んでもいいから眠らせて
 - ・8月15日
3. 学校工場の記録
 - ・軍隊行進の通学団
 - ・学校も軍需工場になった
 - ・空襲の中で

1、学徒勤労働員 ～少女達の出征～

勤労働奉仕という名の勤労働員が始まったのは、日中戦争の始まった1937（昭和12）年9月、通牒「国民精神総動員に関する件」が発せられ、女学校においては慰問袋の製作・発送が行われたときからである。しかし、学徒勤労働員が本格化し、軍需工場への少女達の出征ともいえるべき状況が出現したのは、1944（昭和19）年からである。

全国各地の女学生たちが、風船爆弾、航空機の部品、砲弾の信管、毒ガス、火薬、爆弾製造等の兵器生産の現場で働くようになった。前年の徴兵年齢1年繰り下げによって農村や工場から引き抜かれ戦地に送られる110万人の青年達の穴埋めをするためであった。そのうえモラルの低下のみられる工員に比較して、純真な女学生や中学生は従順で安価な労働力であった。

2月には「決戦措置要綱」が閣議決定され、「学徒は全て今後1箇年常時これ勤労働」という通年勤労働の方針が出された。前年11月に出された「女子勤労働挺身隊結成指令」（千葉県）により、3月23日、安房高女・第34回卒業生（16歳）は女子勤労働挺身隊として日本建鉄船橋工場に出動した。4月、文部省は「学徒勤労働本部」を設置し勤労働を強力に推し進めた。

7月5日、安房高女4年生（15歳）・170名は学徒勤労働報国隊として日本建鉄船橋工場に出動した。8月23日、安房高女3年生（14歳）172名も同工場に出動した。安房地区の高等女学校の生徒たちは軒並み日本建鉄船橋工場へ勤労働された。この他に、館山高女（現・館山高校）では横浜の京三製作所・館山の池貝鉄工所、安房高等家政（現・安房西高校）は日立航空機蘇我工場、長狭高女（現・鴨川第一高校）は日本火工興津工場にも勤労働された。その数は1944年から45年の8月までの2年間に、学徒（在学学生）と挺身隊（卒業生）併せて延べ3,080人にのぼる。

1945（昭和20）年2月、アメリカ軍は硫黄島に上陸した。本土決戦に備え国民を根こそぎ勤労働するため、「国民勤労働員令」が公布された。3月、「決戦教育措置要綱」により「国民学校初等科を除き、学校に於ける授業は昭和20年4月1日より昭和21年3月31日に至る間、原則としてこれを停止する。」ことになった。3月29日、安房高女・第35回卒業生171人は出動中の建鉄工

場から帰校し卒業式を挙げた。

記念写真も時局柄、制服着用は認められず、もんぺ・なっぱ服姿、せめて1日、2日休みたいという願いもかなわず、ただちに工場へ帰っていった。

館山高女4年生は3月31日、京三製作所鶴見工場で異例の卒業式を行った。4月、アメリカ軍は沖縄に上陸した。安房高女3年生160名に対し、日本建鉄の安房高女疎開工場へ出動が命じられた。学校工場で彼女達はジュラルミンや風防ガラスの飛行機部品の製造に従事し、中には仕事の合間に自分たちの血で書いた日の丸を館山航空隊に届ける者もいた。

5月、「戦時教育令」が公布され、「一旦緩急の際は義勇奉公の節を論し給えり」と、学徒に対して最後の奉公を要請した。学校・職場で学徒隊の結成が進められた。8月、本土決戦の最終局面に向けて学徒隊は義勇戦闘隊に再編され、9日には安房高女義勇隊が編成された。「戦時救護に挺身せしむ」（県内政部長通牒教 第546号）として4月から行われた「看護補習教育」の成果が試されるときが迫って来た。

8月15日、日本建鉄船橋工場に出動中の4年生は、工場で「玉音」放送を聴いた。体調を崩し帰省中の者は自宅で放送を聴き、外へ出てみると城山に白い旗が揚がっているのを見た。館山の街頭では徹底抗戦を叫ぶ陸軍将校の姿があり、ビラもまかれた。護北兵团（旭川で結成・房総半島に駐屯）将校による反乱未遂事件である。

しかし、18日、出動中の安房高女4年生は13ヵ月に渡る学徒勤労働員を終え、全員無事帰校した。女子学徒たちの職場は、米軍の戦略爆撃の主たる目標で、まさに戦場そのものであった。

全国の動員学徒の総数は192万7,379人（経済安定本部発表）、学徒動員による死亡者1万966人（内8,953人は原爆による）、傷病者9,789人（内3,994人は原爆による）であった。尚、この数については確たる統計がなく、動員学徒343万2,000人（文部省、「戦争と子どもたち」より）死亡者4・5万人（動員学徒援護会の推定）との説もある。安房においては、長狭中学（現・長狭高校）生1人、石川島航空工業・中村橋分工場（横浜）で作業中墜落事故により死亡、長狭高女生2人、日本火工興津工場で米軍機の機銃掃射による貫通銃創の負傷が記録されている。

2、勤労働員下の青春

〈兵器生産の総合工場へ〉

1944（昭和19）年8月23日午前11時29分、1・2年生の歌う学徒動員の歌「花も蕾の若桜五尺の命ひっさげて・・・」に送られて、安房高女3年生（14歳）172人は、安房北条（現・館山）駅から日本建鉄船橋工場に出発した。この会社の事業は、スチール・サッシ、ドア、シャッター類の生産と兵器部門への進出であった。資本金は昭和10年の再建発足時30万円であったが、昭和18年には2,000万円と70倍近い拡大をみている。船橋工場は「兵器生産の総合工場を建設する」との役員会の決定にもとづき、船橋市の海軍無線電信所の近くの高台に建設された。軍需品製造の最盛期は昭和19年で、従業員も2万人に増加した。（以上社史「けんてつの歩み50年」より）

建鉄最盛期に当たり、県内各地の中学校、高等女学校から動員されており、女学生に限ってもおよそ1,200人、その内、安房の3つの女学校からは、600人余りが動員されていた。出発に当たって女学生達は報国の精神に燃えていた。安房高女3年生のSさんは最後まで一人娘を動員に

出したがらない母親に『何を云っているのよ、1 億総決戦のときよ、私が 1 人行かなければ、それだけ飛行機の生産が遅れるの』と大人びたことを云って親を嘆かせたが、不思議と親不孝をしたという気にはならなかった。」「私の戦争体験～語り続けよう戦争の惨を」房総の会安房支部編・第 1 集、以後「体験」）と述べている。

工場に着くと入所式がおこなわれ、代表が宣誓書を読み上げた。「宣誓 皇国の興廃一に係って戦力増強の如何によって決するの秋 私達は勤労報国隊員として軍事産業に参加の出来まことは無上の荣誉と共に重大なる責任を感じます。憎むべき米英撃滅の為堅忍不拔必勝の信念をもって責務を果たし以て皇恩に報いたてまつらんことを宣誓いたします」

その後、適性検査を受け、ハンマーの撃ち方などの単純作業の実習を受け、各分野に配置された。飛行機部品の型どり、研磨、組立、材料の配送、燃料タンクの覆いの接着等であった。Oさんはなっぱ服に身を固め、ゲートルを巻き、戦闘帽をかぶった。「雨漏りのする工場内におかれた飛行機の尾翼の大きさに目を見はった。慣れない手つきで、夢中でドリルを持ち、力を入れて鉋打ちを始めた。」（前掲「体験」第 3 集）「一機でも多く」と必勝の思いを込めて黙々と何の疑問もためらいもなく働いた。不合格品もかなり出て、いつも、「オシャカを出すな」といわれた。

労務時間は 1 日 10 時間、公休日は月 2 回のみであった。報酬など期待もしなかったが、1 日の報償金 40 銭、1 回家に帰るとなくなってしまった。なお、報償金の額については、報酬ということが念頭になかったためか、体験者の記憶は曖昧である。次の資料を参照した。

「千葉県青少年学徒勤労動員実施要項」

謝金及手当標準

中等学校 男 50 銭 宿泊又ハ昼食接待ノ場合

80 銭 昼食携行通勤ノ場合

(青年学校) 女 40 銭 (同上)

70 銭 (同上)

国民学校ノ児童ニ対シテハ中等学校ノ 6 割程度トスルコト。右ハ実働時間 8 時間ヲ標準トセルモノナリ、旅費ハ別ニ実費ヲ受クルモノトス。」

〈ため息列車～寮での生活〉

空襲下の寮生活は辛いものだった。10 畳 1 部屋に 8～9 人で暮らし、何事も軍隊式だった。引率教師のピーの笛、「起床」の号令で 1 日が始まる。洗面所に一列に並び、「洗顔」で一斉に顔を洗い、「交代」の号令で後ろの者が前に出る。寮からは 4 列の隊列を組み、各学校競って軍歌を歌いながら行進し工場に向かった。途中、高い台上にいる直立不動の部隊長の前を通過するとき、一斉に「頭右」の敬礼をした。帰りも同様であった。

寮に帰ってから寝るまでが、唯一息抜きのひとときであった。長狭高女の F・Oさんは、母からの葉書を何度も何度も読みかえした。

「7 月の末から休みの様ですから、そしたら早速行きます。ゆっくり会えそうな日をいつてよこして下さい。8 日に叔父さんが来られたら豆等は頼みませう。……先日の警戒警報、そちらは尚大変だったでせうね。スリッパが 2 枚では不足でせう。小原先生がお買いになったのをむ

りにゆずっていただいたので叔父さんに頼みます。衣料切符はどうしました。そちらでいただけましたか。夏の物、何が早速必要かしら、ほしい物を沢山書いてよこしなさい。出来るだけ本気になって作って届けませう。ネマキもうすいのをもう1枚と考えて居ります。・・26日に主基に行ったかへり山形やへより、赤い帯を1本買ってきました。

お前のにと、のり豆をまきました。砂糖も大して使わずに大切に取ってあります。今後かへったら、お萩を作ってあげませう。長狭高女4年も興津ださうですが、吉尾の人は誰も行かぬさうです。誰もが戦いです。」

長狭高女3年生は既に5月から動員されていた(右の写真)。当初3ヵ月の予定がずるずると延びて結局翌年の8月まで動員生活が続いた。F・Oさんは生徒代表であった。Y校長や下級生からもたびたび励ましの便りが届いた。校長からの葉書(5月6日付)

「・・3ヵ月が6ヵ月になりましたとか、初めから其の心積もりで行かれたので、皆さんは別に驚かれなかったとは思いますが・・・。そして勉強のみでなく人間性を立派に造ることに骨を折って下さい。種々の学問も結局そこに帰着するのです。忠良な臣民であり得ればよろしいのです。ではお体は大切にしっかりと、中隊長さんにもおよろしく。」

また、工場到着間もない5月10日には長狭高女勤労報国隊員へ課題を通知してきた。「この大詔謹写帳は学校でも全校生徒に練習させ始めましたので、皆様も1部ずつ留守部隊より慰問としてさしあげますから、どうぞ学校と同じく、夜や休み時間等に两三両四、読み味わって下さい。その内これに就いて考査もある筈になっておりますから・・。」1941年12月8日の日米開戦の際の出された詔書の暗写と読解である。

下級生からの葉書(5月10日付)「お姉様達、今日は私達をお励まし下さるお手紙、ほんとうに嬉しく存じます。・・・大海原の遠い果てに戦われる皇国将士の労苦を思い出し私達の心は緊張するのであります。・・・お姉様達どうかお元気でお国の為にお働き下さい。私達も続きます。大平洋の波は5月の色に染まって真青です。」

これらの便りは、この時期、学校が「中学校令」の「皇国民錬成」という主旨を徹底して行っていたことをよく示している。母親の手紙とは違い小さな肩にずっしりと重荷を負わされたようで辛かったとF・Oさんは述懐している。そして夜毎大きなため息をもらしたのである。

安房高女のYさんは昼のことを思い出して布団のなかでぞくつと身体をふるわせた。憲兵隊に連行された友人を先生と貰い受けにいった。朝鮮にいる兄に出した手紙が、検閲に引っかかり連行されたものらしい。無事帰されたが、事情聴取の最中、空襲となり防空壕に退避したとき、手錠をつけた囚人と膝を接するばかりに過ごしたその時のことを思い出したのだ。夜が更け、いつものように電車の通り過ぎる音が響いてくると更紗模様の布団の中から仲間のため息やすすり泣きが聞こえてきた。Yさんも大きくため息をついた。皆は、何時とはなしに、この列車をため息列車と呼ぶようになった。

〈死んでもいいから眠らせて〉

工場での食事は、数千人収容の大食堂で、号令一下一斉に食べ始める。金属の食器に黒くて臭いご飯と煮物か汁物であった。最初はとても喉を通らず食べ残し叱られたが、後にはお腹が空い

てこの臭いご飯が食べたくて待ちどおしくなった。挺身隊員のSさんは台湾から来た見習い工の少年達が、監督の軍人から規定より早く食堂に来たといって激しく叱責され、びんたの制裁を受けている現場を目撃した。次第に食事も粗末になってきて、「大豆のまわりにご飯粒が抱きついて」ようなものになっていった。ときには、じゃがいも3個の時もあった。勢い生徒たちは差し入れがあると、この時とばかり詰め込んだので、必ずお腹をこわした。親が面会に来た翌日はとりわけひどかった。また、生理がとまり体の不調を訴える者も続出し、脚気や腎臓病で帰省する人も出てきた。

1944年の12月頃から空襲が激しくなり、けが人や死者も出たようだったが、一切知らされなかった。資材の不足から工場へ行っても仕事がありません日もあった。工員のなかには投げやりな調子で、「これじゃ負けだね」という人もいた。彼女たちは「こんな人がいるから勝てないんだ」とひどく腹を立てたが何も言えなかった。

何時でも逃げられるよう、寝るときも防空頭巾をかぶり、運動靴を履いて布団に入った。安房高女のNさんは13号室の仲間8人と2キロくらい離れた防空壕に向かって、はぐれないように藁縄をギュッと握って、照明弾がゆらゆら揺れながら辺りを明るく照らすなかを必死に逃げた。ところが、気を張っているつもりでも体が自由にならず、足ががくがくふるえて走れない。時には、防空壕まで行き着けず、身体中雪でびっしょり濡れながら、竹藪の中で一夜を明かしたこともあった。3月10日の東京大空襲の様子は防空壕の中から見た。不気味な花火を見るような光景であった。

空襲が益々激しくなり、防空壕で点呼をとると1人いない。引率のO教諭が急いで寮に引き返してみると押入の中で寝込んでいる。「Kさん、Kさん」といくら起こしても「ここで死んでもいいから眠らせて」と動こうとしない。青野菜のない貧弱な食事と労務と連日の空襲による寝不足のため、女生徒達は極限状況まで追いつめられていったのである。こうした日々の中、唯一、明るく輝く光景は、灰田勝彦一行が慰問にやってきて、何もかも忘れて歌に聞きほれたひとときだった。

<8月15日>

「今日は正午に重大発表がありますから皆職場を清掃してスピーカーの前にお集まり下さい。」と警報課長からの緊張した声が何度も響いてきた。長狭高女Hさんはその瞬間きっとソ連も参戦したことだし、「一億国民心をそろえて必勝へ進んで行こう」とのお言葉であろうと思った。スピーカーからは新型爆弾の威力や防御法など発表になって朝礼は終わった。

「・・・そして11時、・・・。みんなで作業台を清掃し組別にスピーカーの前に並ぶ。・・・皆、緊張し口一つきく人もない。やがて正午いよいよ重大なる発表をすることを告げた。静かに静かに君が代が響いてきた。・・・玉音がひびいてきた。ああ、その時、その瞬間、ただ、ただ、身体の中心が崩れるのを感じた。敗戦、敗戦、まさか？いやそうだ、日本は敗れたのだ。屈辱の思いが、私の身を焦げ尽くすようであった。憂いを帯びた玉音はやがて終わった。・・・くやしい、ああ、悔しい、皆、身動き一つしない。ただ涙を流している・・・渡辺技手が各自の作業台へ帰れと叫んでいた。・・・2時に寮に帰る。

部屋に帰ったら、IさんとNさんが寝ていた。私は廊下をトントンと駆けて戸をがらりとあけ『日本は負けたのよ、しっかりしてよ』病気で休んでいる2人に大声で云い、鞆を部屋の真ん中に放り、ただ悲しいあまり大声で泣いた、・・・2人は呆れ『ほんと・・・』とぼかんとしている。私は悔しくて悔しくて『ほんとよ、みんなに聞いたらいいわ』と喋っているところに・・・みんな帰ってきた、そして、大声を上げて泣いた。・・・『私はまだ負けたなんて気はしないわ』・・・

翌16日は、朝、人の心も知らないかのように良い天気、もやをじっと見つめていると空襲のサイレンが聞こえて来そうな気がする。・・・十時、工場へ出勤する。S班長さんが『このままじゃすまされんなあ、アメリカの奴等いまにみろ』と淋しさを隠すようにあはつはと大声で笑った。そう、今に見ろ、しかし、陸海軍はなくなるし、やっぱり日本は駄目かしら、そうしたら精神力で勝つのだ。M専務のお話があり、終わると工具をきちんと片づける。・・・石原組の工員達が私達のところへ来て『あんた方は米軍が上陸したら箱根の辺りへ行って接待役になるんだよ。男はやっぱり奴隷かな』などと笑っている。」

8月18日に書かれたHさんの手記は敗戦時の工場の様子と心情をよく伝えている。しかし、敗戦にともなう極度の混乱を窺うことはできない。会社側の配慮によるものであろう。「職工や徴用工はこれまでの待遇の不満と敗戦に怒り狂い、手あたりしだいに器物を破壊、一時争乱状態になった。会社側職員は・・・ただ見守るばかりだった。」（「千葉県終戦・占領秘話」）という日立航空機千葉工場と同じような状況はなかったのか。ある挺身隊員は、工員が荒れてひどかったと証言している。体調を壊し途中で帰省した生徒も多かったが、幸い事故もなく長狭高女は8月17日に、そして安房高女4年生は翌18日に全員無事帰校した。

彼女たちが小学校に入学したのは日中戦争の始まる前年だった。6年生の12月には太平洋戦争が始まった。また小学校が児童を皇国少国民の錬成を目的とする国民学校と変わってから、最初の卒業生となった。高等女学校入試の口頭試問では、「海ゆかば」の歌の意味を尋ねられた。お国のために役立つだけでなく、天皇ために死ぬる人間となる指導が徹底されていたのである。女学校では1,2年はまがりなりにも授業を受けたが、3年生の時に勤労働員にかり出され、勉強もせずに4年生に進級した。彼女たちは物心ついたときからずっと戦争の中にあった。

のちに小学校教員になった安房高女のKさんは「平和で豊かな日常生活の中でサイレンの音を聞くと、いまだに一瞬ドキッとする思いを持つのは私ひとりだけではないと思う。心身共に柔軟で、吸収力の強い小中学生時代の教育と体験の尊さ・恐ろしさを改めて考えさせられる。」と述べている。この稿をまとめるにあたって安房高女第36回卒業生、そして長狭高女、館山高女の卒業生の皆様のご協力をいただいた。皆様は異口同音に、二度と自分たちのような辛い青春を体験させてはならないと語られた。またF・Oさんは教職の道を歩まれ、10数年後、母校の校長から「あなた方に大変苦勞をかけてしまい申し訳なかった」との言葉を聞いて、胸のつかえが下りたと述懐されている。

3、学校工場の記録

〈軍隊行進の通学団〉

安房地方の少女達にとって、安房高女の細かいひだのスカートとセーラー服はあこがれの的だった。「ひかり野」と名付けられたクローバーに覆われた校庭の一角を逍遥するセーラー姿の女学

生は少女達の夢だったのである。

しかし、1943（昭和 18）年の新入生（12 歳）たちの夢は入学早々破られ、驚きの目を見はった。新入のランドセル部隊を先頭に汽車通学団は団長の指揮に従い、北条駅（現 JR 館山駅）から 2 列の隊列を組み学校に向かう。片手に荷物を持ち、あいた方の手は肩の高さまで振り上げ、一糸乱れず足を踏みならし行進するのである。安房水産や安房中学の男子達が、「おお、やってるやってる」と眺める中を行く。駅から学校までの間に 3 回、団長の「荷物交代」の号令がかけられた。最初は成瀬写真館の角である。やがて、みごとな桜並木を通り校門に入ると、一斉に奉安殿（天皇の写真を納めてある）に向かって最敬礼する。

猪田先生などは「そんなことをしたらお腹が空くでしょう」といって自分の指導する通学団の生徒たちには軍隊張りの行進はさせなかった。批判的な気持ちをもっても、猪田先生のように行動に移せる教員はまれであった。こんな登校風景に戸惑ううちに、しばらくすると細かいひだのスカートは時局に合わない「もんぺ」にかわった。

6 月には防空訓練を視察するため久邇宮妃殿下が来校し、ぴりぴりした雰囲気の中で訓練が行われた。前年の 4 月、空母ホーネットから飛び立ったドーリトル少佐率いる米軍の本土初空襲があつてから防空訓練が強化され、学校に防空自衛隊が組織され、プールのそばには監視塔も設けられた。

翌 44 年にはいると、3 月には卒業生 184 人が勤労女子挺身隊として船橋の軍需工場へ出動した。

千葉県内政部長から「看護ニ関スル補習教育実施ノ件」（教 第 546 号）の通牒がとどいた。その内容は次のようなものだった。「・・・大東亜戦争ノ現段階ニ対処シ女子中等教育ノ一環トシテ看護ニ関スル教育訓練ヲ強化シ以テ有事即応ノ体制ヲ確立シ女子学徒ヲシテ戦時救護ニ挺身セシムル様致度、（以下略）」（安房高女「昭和 19 年度綴」）

ほぼ 1 年後に起こる沖縄戦において沖縄県立第一高女と沖縄師範学校女子部よって結成された「ひめゆり学徒隊」が、南風原陸軍病院に動員され、軍隊と行動をとみにし、やがて見捨てられ、221 人中 123 人が犠牲になった。房総半島において本土決戦が現実のものになったなら、同じような状況が生じたであろう。

陸軍部隊の体力検定が校庭で行われたり、館山航空隊の士官が弓道場で弓を引く姿も見られるようになった。7 月になると 4 年生が北条駅から船橋に出発していった。8 月には 3 年生も同じ工場へ出動していった。1, 2 年生は学徒動員の歌を精いっぱい歌って上級生を見送った。2 年生が最上級生となり、学校が急にがらんとした淋しくなった。

9 月にはいると田圃に食料用いなご採り、校庭や大網農場、館野農場、報国農場での芋掘り作業が忙しくなった。でも、芋掘り作業のあとの試食会は楽しかった。10 月にはいると連続 20 日間の勤労奉仕作業が始まった。農家の稲刈りや洲崎航空隊への奉仕作業であった。

11 月の後半からは第 2 期の勤労奉仕作業が始まったが、空襲警戒警報も頻繁に出されるようになり、防空壕づくりも忙しくなった。校門へ向かう通路の桜並木が切り倒され、6 基の壕が作られ、最終的には校地の東西南北の縁に沿って総計、50 基余りの防空壕が掘られることになる。防

空用資材と称して館野の山から木材を切りだし運ぶ作業も盛んになった。

1945 年にはいつて 1 月には空襲によって生徒の家が被害を受けるようになり、2 月 17 日には、機銃掃射により第 1 校舎（現・管理棟）の東階段の壁が落ちるという被害も受けた。翌日から 3 学期の考査第 1 日が始まったが、空襲警戒警報が連日発令され、順延になった。3 月 29 日、第 35 回卒業式が行われた。日本建鉄船橋工場から帰校し翌日に卒業式を挙げ、記念写真も時局柄、制服着用が許されず菜っぱ服の記念写真となり、せめてもう 1 日家にいたいという願いも許されず式終了後ただちに工場へ帰っていった。

〈学校も軍需工場になった〉

「学徒動員実施要綱」（1944・3）では女生徒の動員は学校工場によって実を挙げるよう指示しているが、千葉県の場合は学校所在地に軍関係企業が少ないことと学校側の受け入れ態勢の不整備のため、職場出動が先行している。県立高女初の学校工場は 44 年 7 月、佐原高女が 7 教室を工場とし、山下電機株式会社佐原支社工場を開設したことである。続いて 12 月、千葉、木更津、45 年 5 月、安房、6 月、長生等の高等女学校にも開設した。（「千葉県教育百年史」より）開設の手続きは、企業側が軍に申請し、学校は千葉県知事に申請し認可を得るものであった。

45 年 5 月 30 日の安房高女職員会議で、学徒勤労働員出動学校長会議の報告が行われた。内容は、以下のようなものであった。「皇国 1824 号工場（日本建鉄船橋工場）協力工場 100 余 8 割被害、・・・各学校工場協力を求む。

終業時間 30 分延期。終業時刻 男 6:00 女 5:30 30 分延期。

給食 男 390(g) 女 350(g)。

出動学徒は工場医にて治療、学校工場作業生徒は校医にて治療。

終業時刻は各学校に於いて適宜決定、但し、10 時間労務を基準とす。休日は月 2 回、学校工場もこれに準ず。」（「安房高女職員会議決議録」）

このように協力工場の 8 割が被災し生産力が急激に低下するという状況の中で、学校への工場疎開は焦眉の問題であった。また、学校側としても空襲激しい船橋へ娘達を送る事への不安が保護者の間で高まっていた。45 年 2 月 21 日から 3 日間、3,4 年生の父兄会が開かれている。

安房高女への工場疎開の動きは同年 3 月から始まった。4 月 9 日には、万力をセットする作業台 50 台が完成した。いまや在校の最上級生となった 3 年生・160 人に対し、学徒勤労報国隊として疎開学校工場へ出動が命じられた。4 月 23 日には、建鉄から湯沢技師他 4 名が来校し工場の整備が始まった。5 月 4 日に実習開始式が行われ、実習作業が始まった。学校工場指導者として挺身隊員 8 人が来校し、技師とともに 3 年生を指導した。全体の作業指導は 1 日のみで、生徒たちは各部門へ配置されていった。目をつむっても、ハンマーでジュラルミン材が打てるようにと言われ、その通りやって大けがをする生徒も出た。5 月 15 日に工場開所式が行われた。

工場は、雨天体操場（現・旧体育館）、1 年生教室 4 室（現・管理棟 1 階保健室・応接室・校長室）、2 年生教室（現・管理棟 2 階、作法室など）であった。雨天体操場の全面に厚さ 10 c m 程度の板の作業台がおかれ、万力やグラインダーが設置された。体操場東側にあった昇降口（コンク

リート舗装）部分が2つに分けられ、南側に配電室が設けられた。ここには電気技師1人（勝山町佐久間村の人）が働いていた。昇降口北側部分には検査室が設けられた。ここには建鉄出向の技師が2人いて、この技師の指導の下、5,6人の生徒が検査係として働いていた。

工場での作業は、荒引きされたジュラルミンの飛行機の部品を万力で固定し、折り曲げたり、ヤスリで整形したり、グラインダーで削ったりするものだった。このため、ジュラルミンの粉が体に毒だという噂が生徒の間に流れたこともあった。工場では、4人1組で作業を行い、製品は検査室に持ち込まれ検査された。検査は製品を平らな板の上に置き、金槌でたたき平らにできているかどうか調べたり、形通りできているか精確に寸法や角度を調べた。製品自体は小さなもので、生徒たちには何に使うかよく解らなかったが飛行機の部品であると噂されていた。不合格の製品もかなりあり、これはオシャカ品といってやり直しであった。「またオシャカが出たよ」と言うと、皆は「なによ！」なんて不平を言いながら、不良品を持ち帰った。

検査室の北隣の体育教官室が納品場所となっており、合格した製品は、数を数え、段ボール箱に整理して納めた。また教室棟の工場では、設計図にしたがい風防ガラスを裁断し型を取る作業をしていた。2階には検査室があり検査係が寸法形をチェックした。

材料は船橋工場に出動していた4年生が10人程度の学校工場材料輸送班に組織され、配給品と共に運んできた。5月に1回（2人）6月に4回、7月に2回の記録が残っている。製品は、輸送班によって持ち帰られたと思われるが、3年の生徒がリュックに詰めて、建鉄職員に引率されて運んだこともあった。7月20日に第1回、8月になって第2回、結局、3年生による運搬は2回で終わった。一度は運搬の途中で空襲に遭遇し帰れなかった。

〈空襲の中で〉

作業時間は、学校の始業・終業と同じだった。検査係は昼食時間もなく交代で昼食をした。休日もあったかどうか、「月月火水木金金」の時代なのでなかったように思うと、当時の体験者・S・Tさんは回想する。警戒警報が出たときも登校した。

ちなみに、1945（昭和20）年、安房地域の空襲・警戒警報の発令状況を昭和20年度・安房高女2年3組学級日誌と教務日誌をもとにまとめてみると次のような発令回数であった。4月：警戒警報20・空襲警報3、5月：警戒警報27・空襲警報6、6月：警戒警報15・空襲警報1、7月：警戒警報28・空襲警報10、8月：警戒警報13・空襲警報7。

この状況の下でも、登校するのが当たり前という感じで、特に死というものを恐れるという感覚はなかったとも回想している。しかし、かなりの混乱はあったようで、安房高女では7月20日に次の「学校工場出席規定」を作成している。

「1、正午マデニ空襲警報解除ナキ場合ハ登校セズシテ可。

2、十時頃マデ空襲警報解除サレタルモ敵襲ノ懼レアル場合ハ登校セズシテ可。

3、交通機関破壊サレタル場合登校セズシテ可。

4、警報解除サレ十四時マデニ登校デキル場合ハ登校ノコト。

5、特別ノ事情ニヨリ登校デキヌ場合ハ明日届ケ出ノコト。

6、ソノ他ハ欠勤トミナス。」（安房高女・昭和20年度文書綴り）

7月30日、下りの通学列車が館山駅に着くと警戒警報なしに空襲が始まり、館山航空隊に爆弾

が落とされ、黒煙が激しくあがった。生徒たちは走って学校に向かい、法性寺の防空壕に飛び込んだ。その後、校門両脇に並んでいた学校の本格的な防空壕に退避した。校地にある 50 か所余りの壕のなかには覆いのない穴だけのものもあった。そこに飛び込んだ生徒達は機銃掃射をしながら飛び去った米軍機の操縦士の顔をはっきり見たと興奮して語りあった。機銃掃射の弾丸が突き刺さり、校庭には無数の穴があいていた。

連日、警戒警報、空襲警報が発令されるなかで、全員日の丸はちまき姿で必死に働いた。「作業の合間には、数名で小指を切り、しぼって出した血で日の丸を描いて館山航空隊に届けた」（「安房南高等学校 60 周年記念誌」）こともあった。

7 月 6 日、千葉高女・学校工場では生産の遅れを取り戻すため日曜にも関わらず生徒は出勤し、空襲下に職場を死守し、死者 2 名、負傷者 2 名を出した。この爆撃で、千葉高女の前にあった千葉病院に爆弾が落ち、多くの死傷者が出た。学校工場も軍需工場として米軍の戦略爆撃の目標であったのである。

8 月 15 日は休日であったが、特急品の生産のため安房高女 3 年生 20 人が工場に出動していた。お昼頃になると、天皇陛下のお言葉があるからといって体操場に集められた。彼女達には放送の内容はよく分からなかったが、なんだか戦争に負けたみたいよ、何かあったら皆で自決しようと話し合った。T さんは呆然としてしまい、そのとき先生方の様子がどうだったかは全く憶えていない、憶えているのは隣にいた子のことだけであるという。

16 日に、飛行機からビラが撒かれた。「終戦は敵の謀略だ。我々は断固として最後まで戦う。」という内容であった。街頭でも陸軍の軍人が「陸軍は無傷だ、海軍の言葉に騙されるな、国民よ総決起せよ」と訴えていた。T さんは、家の近くに陸軍がたくさんいるよという山本の友人の話を聞くと、この軍人の言うことを信じる気持ちにもなったという。事実是一部将校達が終戦に反対して反乱を企てたものだった。

17 日、那古船形国民学校で護北兵团（旭川で編成された部隊）の終戦詔勅伝達式が行われることになっていた。ある大隊の将校が「伝達式を期して、侍従武官、師団長をはじめ全将校を・・・銃殺して自動車で東京に向かう」（「千葉県の終戦・占領秘話」）という反乱計画をたてたが、未然に防がれたものだった。

安房高女では米国の国旗が翻ってとはと、「ひかり野」の国旗掲揚塔は倒され、学校工場は 16 日に閉鎖された。

（この稿をまとめるにあたって、安房高女・第 37 回卒業生・S・T さんのご協力をいただいたことを付記する。なお、掲載のポスターはすべて昭和 19 年度 3 年生の作品である。）

文責 県立安房南高等学校 石 崎 和 夫